

焼夷弾の痕が残る蔵。 生活の一部として今も現役です。

伊藤家蔵 伊藤慶明さん

子どもの頃、蔵は怖かった

この母屋も蔵も大正時代の建築と聞いています。私の父が1935（昭和10）年ごろに購入して谷町3丁目から移り住み、私は1945（昭和20）年にここで生まれました。子どもの頃は、蔵の前で、弟とよくキャッチボールをしました。蔵の壁にボールをぶつけるとちょうどいい具合にはね返るので、一人の時にもそうやって遊んでいましたね。

蔵の中の壁に今もかかる恵比寿大黒さんの古い面は、私が子どもの頃からありました。父に言われて、蔵に物を取りに行くことがあったんですが、2階へ上がる階段から、ちょうどそのお面が目に入るんです。蔵には照明がなく、窓を開けて外の明かりを入れるまでは、真っ暗な中、懐中電灯を手に入っていかなければならず、怖いというか、気味が悪いというか……。おっかなびっくりで、そおっと行ったものです。実際に閉じ込められた記憶はありませんが、悪いことをすると「蔵に入れるぞ」と脅かされました。子どもにとって蔵は、暗くて怖い場所でしたね。そうかと思えば、父と喧嘩をした母が、家出を装って、こっそり蔵に隠れていた、なんていうこともありました。

蔵のことで印象に残っているのは、父から聞いた戦時中の話です。時期は定かではないのですが、おそらく1945（昭和20）年の6月か7月頃。昼間このあたりに空襲があり、わが家には9発の焼夷弾が落ちました。母屋の方をようやく消し止め、ほっとして寛いでいたらしいのですが、夜になって、念のためにと父が屋根の上へのぼって穴の数を確かめたところ、蔵の上にも穴があるのに気がついて……。入ってみると、蔵の屋根を突き破った焼夷弾が布団だんすの中でくすぶっていたそうです。かなり長時間くすぶっていたわけで、よく燃え広がらなかったなあと思うにつけ、蔵を守る恵比寿大黒さんのおかげかなと。何よりも、消し止めた父の慎重さが心に留まり、蔵といえど今もその話を一番に思い出します。



焼夷弾の痕跡

蔵所有者 伊藤慶明さん

1945（昭和20）年 6月か7月の大阪空襲で蔵・自宅に焼夷弾が落ちるが、燃焼を免れる

1945（昭和20）年 11月に大阪の今の地に生まれる

1988（昭和63）年頃 蔵の壁・屋根修理

2009（平成21）年 高知大学定年退職。以後ぼつぼつ身辺整理中

座右の銘は、「常疑到真」。ご自身の造語で、「常に疑問をもって事に当たれば、真実・真理を発見するに到ることの意。」とのこと。好きな言葉は、「念ずれば通ず」。お顔が蔵にある恵比寿さんに似ていると言われるそうです。



蔵が唯一の収納スペース

収納しているのは、おもに布団、座布団、建具など。1階にある大きな長持は婚礼布団が入っていたもので、古いものは処分しましたが、母のものの家内のものは今も置いています。以前は、夏と冬で建具を入れ替えたりもしていましたが、今は夏座布団と冬座布団を入れ替えるくらいです。本好きだった父の蔵書も今は蔵のほうに移し、一角にまとめて収納しています。曾祖父が晩年、僧侶をしていたこともあり、「折敷膳^{おしきぜん}」と呼ばれる足のないお膳や湯飲みなどの食器類もありますね。昔は屏風などもあったようですが、戦後の貧しい時期に売ってしまったようです。



家具の金物

蔵の利点の一つは、本のような重たいものも入れておけること。また、温度や湿度の影響を受けにくいので、布団を入れておいてもカビが生えることはないですね。最近はずっかりずぼらをしてはいますが、昔は1階と2階の窓を開けてまめに通気もしていました。

この蔵は外部に通じる扉はなく、出入口が母屋と直結しているので出入りがしやすく、使い勝手がいいですね。母屋は納戸部屋のような収納スペースがない造りなので、ここに住むかぎりは蔵がないと不便です。今も蔵が生活の一部になっていますし、今後も物置がわりに使っていくつもりです。

近所の大工さんをお願いして、蔵の手入れをしたのは昭和の終わりごろのことです。屋根の瓦の角々が植木で傷み、そこから水が染み込んで壁が落ちていたのを、ようやく修理しました。土壁の上に漆喰を塗り重ねる昔ながらのやり方ではなく、土壁の上に板を張り、その上に漆喰を塗るという簡易な方法ではありますが、これでしばらくは持つと思います。40年ぐらい前、まだ父が健在だった頃は、庭の赤土にふのりと切った縄を混ぜて、自分たちで